



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

中高年女性による子育て支援システムの構築にむけて：

中高年女性による子育て支援に関する先行研究の分析

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田崎,知恵子, 田村,毅, 久保,恭子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/108123

中高年女性による子育て支援システムの構築にむけて

—— 中高年女性による子育て支援に関する先行研究の分析 ——

田崎 知恵子*・田村 毅**・久保 恭子***

生活科学分野

(2010年9月27日受理)

【緒言】

我が国の少子高齢社会が現在のものとなり社会的整備がその現象に追いつかずいくつもの問題が生じている。医療福祉、教育支援上の対応の不備は、現在、乳幼児・学童をもつ子育て中の家庭にも影響し、経済的負担や心身の疲労とそれに伴う諸問題をひきおこす要因ともなっている。特に核家族化が進んだ子育て世代への育児支援は、行政や地域での支援策は拡充しつつあるがまだ充分とは言えない。2010年から施行された子ども手当の支給や高校の授業料無料化は子育て世帯への経済的支援として期待されている。しかし、子どもを養育する、世話をするという実質的かつ直接的な支援に関しては未だ充分とは言えない。保育所の不足、父親の育児休業獲得が進まない、核家族化、母子の孤立などで子育てに他人が介入する機会の減少などは、時として子どもの世話にあたる母親に過剰なストレスを生じさせることもあり、悲惨な事件に発展する危険性もはらんでいる。このような背景をうけ、本研究は子育て支援の中でも特に、実質的、直接的に子どもの世話に対する支援を構築することを目的に取り組むこととした。家庭内における子どもの養育・世話は主に子どもの両親（夫婦）が担うが、母親の職業の有無にも関わらずその多くは母親が担い任されることが多い。そして、人的支援が欲しい時、頼りにされ、ゆだねられるのが母親の実母、義母らである。特に有職者では、子どもが病気の時の保育や保育園の送り迎え等、子どもの祖母の出番が極めて高く、好む好まざるに関わらず祖母が孫の世話に翻弄される現実もある。

筆者らはこの祖母による子育て支援を祖母だけに頼らず、女性がつもつ祖母性を活用し、広く中高年の女性による子育て支援を社会的なシステムとして構築したいと考えている。少子化と同時に高齢社会となった我が国の女性の生涯発達の観点からも子育てキャリアや祖母性を有効に活用する手立てを探ることは意義深いと考える。本研究に先立ち、これまでに祖母世代を対象とした子育て支援に関する研究の傾向を知り今後取り組むべき課題を明らかにしたい。

【方法】

医学中央雑誌 Web 版を使用し「高齢者」AND「育児支援」、「祖母」AND「育児支援」、「祖母性」、「祖母力」をキーワードに2000年以降の高齢者における子育て支援に関する研究論文を検索した。それらの研究から得られた結果を、テーマ・研究目的・研究対象（標本）、研究方法、主要概念、分析方法、および結果要約に類似分類をし、これまでの高齢者や祖母らによる育児支援の傾向や課題を把握した。また祖母性について取り上げられている資料を抽出した。

用語の定義

祖母：「血縁のある孫のいる女性」

祖母性：「女性が、心理的・社会的に祖母になること」

祖母力：「育児支援の担い手としての祖母の力」と定義した。

* 日本保健医療大学
** 東京学芸大学（184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1）
*** 埼玉医科大学

【結果】

検索された論文は17件であった。(表1. 結果参照) この内6件^{3) 6) 9) 13) 17)}は母親の育児に関するストレスや育児困難感、母親の実母・義母との育児観や育児方法の違いで生じる不安など主に子育ての現状と母親が実母、義母らに期待している支援を明らかにするものであった。これらの中には、実母と義母とでは別居であっても実母の方が情緒的つながり強いとし、育児支援の認識や期態度は支援の受け手の続柄や家族形態によって異なると結論付けているものや、里帰り分娩をした母親が母親として自立していくためには実母による育児支援は欠かせないと結論しているものがあつた。また、母親が妊娠から産後1か月までの間に妊娠出産に関して何を情報源として頼りにしているのか調査したものでは1位は育児雑誌・書籍、2位は医療従事者、3位は友人・実母であり義母の影響は低いと結論しているものがあつた。3件^{4) 12) 14)}は、祖父母らを対象に育児支援プログラムやセミナーの実施と評価を報告し、有用な孫支援のあり方を提示するものであつた。これらは実際に生後1年未満の孫の世話に関わる祖父母を対象にプログラムを組み、看護師らが実施しその後参加者に対して質問紙調査をしてプログラムの評価を行っている。これによれば①祖父母らは両親(孫の親)との関係の持ち方に大きな関心を持っている。②専門家による情報提供は育児対処能力を高めたり情報の共有化を通して家族の関係性を良好にするうえで有効である。③参加者同士の情報交換は育児情報の受容や育児対処能力の客観視をもたらす。④多様なニーズの系統化、プログラムのテーマ選定、プログラム時期、ピアサポート力を高めるための看護方法の開発が課題であると報告されている。その一方で、前述した6件に分類した研究の一つでは、母親は祖母学級を不要と感じておりそれより見守っていてほしいことを願っていると報告しているものがあつた。2件^{7) 16)}は、母親が実家に里帰り出産しその後実家で受ける実母からの支援と母親の育児感情や子どもの発達的变化を縦断的に捉えているものであつた。この論文では里帰り群、非里帰り群を比較しても家事・育児を担っているのは母親か実母が大部分であり女性に偏重した役割分業が根強く存在している、性別・世代を超えた支援が必要であるとし、ほとんどの母親が里帰り中と比較して里帰り後は家事分担が増加しておりそのことが「育児の能力感」「子どもへの肯定的感情」に負の影響を与えていると報告している。またこの調査の続報として母親に対するサポートは実母、夫

いづれのサポートも重視されている。子どもが成長しても同様で月齢、年齢で差はない。育児の初期は家族や親族の「自助」として行われることが多いと報告している。以下、孫と祖父母の親密性の形成に関するもので祖母・祖父の年齢別や遠居か同居かの住居距離との関連を明らかにしている論文²⁾が1件あつた。これは、高齢者への親密性が生まれる原点を考察する目的で学童175名を対象に実施した質問紙調査の結果を分析していた。これによれば、①身近な祖父母は性別では「祖母」で父母方別では「母方」で女性の優位性がみられた。②住居距離では「近い」が優位。③食事の世話においては70代より50代が有意に高い。④孫の性別では男児より女児の方が情緒的世話に対して有意に高い。⑤贈り物・小遣いは遠居が、遊んでもらったなど情緒的世話は同居が有意に高い結果が出たと要約している。その他、大学生をもつ母親が将来的に孫世代の育児に関わる可能性を調査した論文⁵⁾、子育て意識の変遷として時代的背景からみた年代別子育て意識の変化を探った論文¹⁾、現在、孫をもつ祖母である女性が孫の世話に関わることで得られる肯定感や不安から、孫世代の育児に関わることで女性の生涯発達における影響を考察した論文¹⁵⁾、出産後早期の母親への育児協力者がその後の母親の母親意識に与える影響を考察した論文¹⁰⁾、現在、孫がいるかないかに関わらず50～60代の女性を対象に住民支援として孫世代の育児支援に関わる可能性について調査した論文¹¹⁾がそれぞれ1件づつあつた。高齢者による育児支援に関する研究はあるものの、祖母性や祖母力に着目した子育て支援に関連した論文は1件¹⁵⁾だけであつた。しかし2000年以前1992年の論文に「大都市高齢女性の祖母性」により祖母の意味類型を紹介している先行研究があつた¹⁸⁾。東京23区内の60歳以上75歳未満の高齢者7000人を対象とした質問紙調査の結果から祖母の意味類型を提示している。これによると祖母の意味類型は年齢、教育、親交関係、コミュニティー活動、生活満足度、孫の年齢など相互の中に形成される。この意味類型は高齢女性のライフスタイルの指標のひとつになる可能性があるとして述べている。さらに意味類型の多い順に、①均衡タイプ、②シンボリックタイプ、③個人志向タイプ、④疎遠タイプ、と命名している。これらのタイプは孫の年齢、家族外のコミュニティー、祖母の年齢によって規定されてくると説明している。

以上18の論文の研究対象者は実生活において祖母であるか、乳幼児をもつ20代～30代を中心とした子育て中の母親であり、(大学生の子どもを持つ親を対象にした論文が1件あり) 子どもや孫のいない女性を対

象としたものはなかった。

【考察】

検索された2000年以降の17件の内6件が子育て中の母親の育児ストレスや実母、義母との育児観・育児方法の違いで生じる不安などにどう対処していけばよいかを探る目的で研究されていた。これらの研究の対象者は主に母親であり、または母親との意識の違いを知るために併せて同居の母親、義母らに質問紙や電話調査をしていたが対象の主体は母親である。母親が育児を継続していく上で、実母や義母がどのような役割を果たしそのような支援が望まれているのかを述べている。母親が育児を継続していく上で、家族、特に実母や義母、すなわち子どもにとって祖母の存在は母親にとって大きな支えになっていることは明らかである。子どもにとっては同じ祖母であっても母親に対してどれほどの影響力を持っているのかについては、実母の力が肯定的な影響力があると言うことも浮き彫りになっている。育児をする主体である母親に最も近い（血縁のある）祖母の孫育て支援への期待は大きいと言える。しかし安藤の論文で紹介された祖母の意味類型を参考に祖母の孫支援への関わり方をみると、積極的に孫に関わることに負担感のない者と疎遠であることを望んでいる者もあり、母親の期待と祖母のタイプが一致しない時には、母親にとっても祖母にとっても双方に何らかの感情的違和感が生じるおそれがある。これが実母であろうと、義母であろうと家族という制約の中で生じる違和感他は他の家族成員への影響や、育児以外の活動への影響など家族生活そのものに波及するおそれがあると言える。筆者らはこの家族という制約に限定されない、広く中高年の女性の祖母性を活用したい考えであるので、家族内に祖母がいてもいなくても、または家族内の祖母が有職者であったり、他に役割がある場合など、母親が期待する支援に充分応えられない状況の時には家族間・血縁に頼らない祖母力を活用できるのではないかと考える。しかし、広く中高年女性を対象としても祖母の意味類型と同様に孫支援にどれほど関われる可能性があるのかを充分アセスメントする必要がある。個人個人の子育てキャリアもさることながら、それをどういう形で活かしたいと考えているのか、個人の心理社会的背景を把握した上でその可能性を探らなければならない。

検索された論文のうち3件は祖父母らを対象にした育児支援プログラムやセミナーの実践・評価報告であった。これらは概ね参加者らには好評で、効果的で

あったとしているが課題としては多様なニーズの系統化、プログラムのテーマ選定、プログラム時期、ピアサポート力を高める看護方法の開発をあげている。これらの課題はいかにニーズが多様化しているかを示すものといえる。個々の家族の事情、祖父母らの背景または意味類型によって数多くの支援のあり方や、期待のされ方が明らかになったのではないだろうか。プログラムやセミナーは、全体で複数人を対象に実施して効を成す場合と個別に対応しなければならない課題もあるだろう。かつ、その方法も多様化に対応すべく柔軟に構成されなければならないと思われる。別の研究報告では、「母親は祖母学級を不要と考えている」と指摘しているものがあった。この指摘はここで取り上げた実践プログラムとは無関係の報告で、関連性のないものである。しかし、いずれの祖父母対象の孫育てクラスであってもそれを不要と感じる母親がいることも事実であり耳を傾けたい内容である。ここでは母親は、祖父母らに対して孫の世話の実際（know-how）を学んでくれるよりも、見守って欲しい、困った時に相談にのって欲しいことを期待しているものと思われる。これも多様性の表れのひとつと言えるだろう。このように感じている母親と、昔の育児方式では母親に迷惑が罹ると考え、勇んで祖父母学級に通う祖母との小さなすれ違いが後の大きな亀裂にならないよう双方の考えや行動を調整してゆく役割が支援を支える我々にも課せられている。

検索された論文の内2件は、母親が実家に里帰り出産しその後実家で受ける実母からの支援と母親の育児感情や子どもの発達の変化を縦断的に捉えているもので、里帰りの有無に関わらず、家事・育児を担っているのは母親か実母で女性に偏重した役割分業が根強く存在していると報告している。里帰り出産は日本固有の出産形態で、母親にとっては婚家先での嫁役割から解放され娘時代のように両親から支援を受けられる点で精神的に安定した産褥期を過ごせることから、現代でも居住地と実家の遠近、また首都圏、地方にかかわらずしばしばみられる出産形態である。しかしこの間、自宅では夫がひとりで生活を続けることとなり、出生児との愛着形成や育児分担の意識形成が遅れる可能性が危惧される。現在、育児は夫婦が共同でするので夫が協力するものではない、という意識がかなり浸透してきたがそれでも、現在育児世代にある夫婦の親世代（祖父母世代）にとっては、家事育児は女性の役割と考えている者も多く、それが日常の生活として滞りなく営まれている現実がある。その現実の中で産褥期を過ごすことで、母親が自宅に戻ったあとに生じ

る家事育児の負担感にも影響が及ぶことも考えられる。論文では、育児の初期は家族や親族の「自助」として行われることが多いと報告されているが、里帰り出産の是非を問うことよりも、自宅に戻ったあとの育児サポートの重要性を認識し、とぎれのない継続した支援を提供できるためのシステムづくりが必要である。

孫育て支援に関する直接的な研究論文ではないが、人間が将来に向けて祖母性を形成していく上でその過程を理解する一助になるのではないかと考えられる報告に、「学童期の孫が祖父母に抱く親密性の関連要因」²⁾があった。これによれば、身近な祖父母は性別では「祖母」で、父母方別では「母方」であり女性の優位性がみられ、孫の性別では男児より女児の方が情緒的世話に対して親密性が高いと報告されている。子どもの世話をする、されるという関係において学童期からすでに女性性の優位性が示されており興味深い。これは、人種や地域を越えた傾向なのか、日本固有の傾向なのかは解らないが、祖母-母親-娘のつながりには生命を育む根源的な能力が潜んでいるのではないだろうか。たとえ血縁の子や孫ではなくてもこのような能力を生涯発達の糧として活用できれば良いと思う。

【結論】

祖母とは血縁のある孫がいる女性であるのに対し、筆者らは祖母性を、「女性が心理・社会的に祖母になること」と定義し、女性が次々世代の子育て支援に関わることは生涯発達に良い影響を与えていると考えた。しかし誰もが良い影響を受けるとは限らず、負担や不安を感じている者、断りたくても断れない者もいることから、現在の祖母による子育て支援は「家族の絆」という情緒的な支えだけで成り立っているシステムだといえる。女性がもつ祖母性を活用し、また子育て支援が中高年女性の個人的な不利益につながらないよう支援の構築をしていく必要がある。先行研究で明らかになったことをふまえ今後著者らは、

- 1, これから祖母になる世代、個々の心理社会的背景を把握した上で孫支援への可能性を探らなければならない。
- 2, 支援を受ける側、提供する側、双方のニーズと期待を把握し関係を調整していく役割が課せられている。
- 3, 長期にわたる子育て支援に途切れが生じないよう、継続した支援を提供できるためのシステムづくりが必要である。

この3点を認識し、女性が、祖母になることの意味や、自分の孫を含めた子育て支援に対する考えおよび価値観を明らかにし祖母性の体系化を図るために、祖母準備期にある40～50代女性を対象とした具体的な調査研究が必要だと考える。

【参考文献】

- 1) 吉田貴美代, 他著「子育て意識の変遷-時代的背景から見た年代別子育て意識の変化-」聖マリア学院紀要 2004年
- 2) 宮地由紀, 泊祐子著「学童期の孫が祖父母に抱く親密性の関連要因」家族看護学研究 2005年
- 3) 遠藤恵子, 佐藤幸子, 三澤寿美著「祖母の孫育児に関する研究(第2報)-祖母と母親の育児支援に関する認識の相違-」
- 4) 鶴川明子著「孫育てセミナー-育児支援としての祖父母へのアプローチ-」保健師ジャーナル 2005年
- 5) 岡田江梨子, 後藤純子著「祖父母の育児参加に関する研究」2006年
- 6) 菅原優子 他著「母親としての自立に向けた祖母に対する育児支援立-電話訪問を活用して-」秋田農村医師会 2006年
- 7) 南貴子, 小原敏郎, 武藤安子著「育児初期の母親の育児支援のあり方に関する検討-「産後の里帰り」経験に焦点をあてて-」日本家政学会誌 2006年
- 8) 柳川真理著「周産期保健指導に関する一考察」香川母性衛生学会誌 2006年
- 9) 菅原光子, 畠山由美, 明石智子著「母親の育児行動に影響する祖母の育児支援」日本助産学会誌 2006年
- 10) 榮玲子著「産後1ヵ月の育児協力者別にみた褥婦の乳児への愛着と母親としての意識」母性衛生学会誌 2006年
- 11) 松岡由美子, 菊池チトセ著「50歳代および60歳代の女性の地域における育児支援活動に関する意識調査」埼玉医科大学 短期大学紀要 2006年
- 12) 前原邦江 他著「乳児を持つ家族への育児支援プログラムの開発-出産後1～3ヵ月の母子を対象とした家族支援プログラムの評価-」千葉看護学会誌 2007年
- 13) 角川志穂, 佐藤ツセ子著「育児支援者である祖母に求める母親のニーズ」日本助産学会誌 2007年
- 14) 石井邦子, 井出成美, 佐藤紀子著「家族員の育児支援対処能力向上のための孫育児支援プログラムの有用性と課題」千葉看護学会誌 2008年
- 15) 久保恭子, 刀根洋子, 及川裕子著「わが国における祖母の育児支援-祖母性と祖母力-」母性衛生学会誌 2008年
- 16) 小原敏郎, 入江礼子, 南貴子, 武藤安子著「育児初期の母親の育児支援のあり方に関する検討Ⅱ-子どもの発達的変

- 化, 育児サポートとサポート源の関係構造に焦点をあてて-」日本家政学会誌 2008年
- 17) 吉本早由利, 高田昌代, 安達久美子著「仕事と育児を両立させる母親が体験している家族からの支援」 2008年
- 18) 安藤 究, 高橋勇悦著「大都市高齢女性の祖母性」総合都市研究 1992年

発表年	テーマ	目的・課題	研究対象 (標本)	研究方法	概念	測定手段	結果要約
1) 2004	子育て意識の変遷 - 時代的背景から見た 年代別子育て意識の 変化 -	経済的背景の違いによる母親の育児意識と子育て方法を明らかにした。	20代84名 40代44名 60代58名	質問紙調査	育児意識 育児支援 育児方法		40代が育児意識が最も低い (育児への肯定感が低い) 高度経済成長政策を背景に女性の社会進出が進んだ時代で、育児休業、保育所の整備などの環境整備は不十分な時代であったためか。この頃より未婚の就労女性の増加、育児の孤立化、幼児虐待などが顕在化してきた。夫の協力は20代が最も多い。 育児方法は時代とともに変化している。にもかかわらず、3歳までの育児の重要性に対する意識は変わっていない。
2) 2005	学童期の孫が祖父母に抱く親密性の関連要因	学童期にある孫が抱く祖父母の親密性と、祖父、祖母別年齢、孫の性別と居住距離の関連を明らかにする。高齢者への親密性が生まれる原点を考察する。	学童175名	質問紙調査	親密性 祖父母の年齢 孫の性格 居住距離	祖父母・孫関係評価尺度 SPSS Ver10	高齢者への親密性が生まれる原点を考察する。母方、祖母、近居が有意 ①身近な祖父母は性別では「祖母」で父母方別では「母方」で女性の優位性がみられた ②同居距離では「近い」が優位 ③食事の世話においては70代より50代が有意に高い ④孫の性別では男児より女児のほうが情緒的世話において有意に高い ⑤贈り物、小遣いは遠居が、遊んでもらったなど情緒的世話は同居が有意に高い
3) 2005	祖母の孫育児に関する研究 (第2報) - 祖母と母親の育児支援に関する認識の相違 -	母親の育児支援の期待や実態を明らかにする。(実母、義母別)	山形県 保育園児の母360名 その実母と義母720名	質問紙調査	母-実母 母-義母 同居・別居	育児支援度・態度 4段階リッカート法	別居でも実母との情緒的つながりが強い 育児支援は提供者、受けての統柄や家族形態によって異なる。
4) 2005 (活動報告)	孫育てセミナー - 育児支援としての祖父母へのアプローチ -	活動報告 孫育てセミナー実施。	40名祖母及び家族	1シリーズ 2日間			祖母世代は人工乳全盛期、母乳栄養に謝った認識をしている人が多い。正しい知識を伝えること、新しい育児情報を提供する、役割を再認識する機会とすることを目的に実施 育児法の違いによる不安の解消になる 祖父母の関心は高い。新しい育児情報の提供、祖父母の役割認識
5) 2006	祖父母の育児参加に関する研究	これから祖母になる世代の女性が祖母になった時育児参加したいか明らかにする。	山形県 大学生の母親95名	質問紙調査		孫育て参加に対する意識について4段階リッカート法	プレグラシマの育児参加への意識 同居より近居で支援したい。 自分が祖父母との育児方針の違いを経験した場合祖母として育児に参加する時間じょうなことがおこらないか不安
6) 2006	母親としての自立に向けた祖母に対する育児支援のあり方に関する研究 - 電話訪問を活用して -	里帰りした母親の自立に向け祖母が支援している育児内容を知る。	退院後、里帰りしている母親とその実母	電話訪問	母親の自立		離婚が母親として自立していくために祖母の育児支援は欠かせない。 祖母は、家事支援、上の子の世話、沐浴、オムツ交換、自分の経験を基に対応している。
7) 2006	育児初期の母親の育児支援のあり方に関する研究 - 「産後の里帰り」経験に焦点をあてて -	産後の里帰りに焦点を当てその効果と課題を検討する。	乳幼児を持つ母親158名	質問紙調査	産後の里帰り 母親の育児感情 家事 育児支援		里帰り群、非里帰り群を比較しても家事育児を担っているのは母親や実母が大部分であり、女性に偏重した役割分業が根強く存在している。 性別、世代を超えた支援が必要。ほとんどの母親が里帰り中と比較して里帰りは家事分担当が増加しておりそのことが「育児の有感感」「子どもへの肯定的感情」に負の影響を示していた。父親が子どもと会う頻度が母親の育児感情に与える影響には有意な差はなかった。 まだまだ子育てが家族の自助として行われていることが明らかにした。

8)	2006	周産期保健指導に関する一考察	①母親は妊娠から産後1か月まで実母、義母からの援助をどのように評価しているのか、 ②母親は実母、義母に何を期待しているのか知る	出産のため入院した女性 198名	質問紙調査	周産期 祖母学級 意見の相違	JMP Ver 4.05 (SAS Institute Inc)	母親の情報源は、1 位育児雑誌、書籍 2 位医療従事者 3 位友人実母、で義母の影響は低い 褥婦は祖母学級を不要と感じている。異世代間での縦の情報伝達を視野に入れた包括的保健指導が必要
9)	2006	母親の育児行動に影響する祖母の育児支援	祖母の育児支援が母親にどのように受け入れられ育児行動に影響しているか明確にする。	健診に来た母親と付き添いの祖母 45組 (大館市)	母親：質問紙 祖母：インタビュー			母親は祖母からの育児への助言について役だったと感じている。一方で母親と祖母間で育児法は行く時間に違いがある。最新情報を盛り込んだ継続的支援を行っていくことが必要。
10)	2006	産後1カ月の育児協力者別にみた褥婦の乳児への愛着と母親としての意識	育児協力者が誰であるかを知るとともに、その育児協力者と母親の乳児への愛着や母親としての意識との関連を分析し、看護者からの育児支援に向けた基礎的研究	産後1ヵ月健診の褥婦 107名	質問紙調査 愛着尺度	産後1か月 育児協力者 乳児への愛着 母親としての意識		育児協力者が実母や義母の場合、夫と比較して「乳児への愛着得点が高い」と高かった。また母親としての意識は育児協力者が実母の場合「母親」として活動している時が自分らしい」など母親としての肯定的な意識が高かった。夫や義母の場合「子どもがいてるため自分の思い通りにできない」など制約感や負担感に関する意識が強い。
11)	2006	50歳代および60歳代の女性の地域における育児支援活動に関する意識調査	育児支援に関する意識、地域における支援者としての可能性の有無を明らかにし、住民支援への示唆を得ること	50～60代女性 182 (埼玉県) 名	質問紙調査			対象者の46%が育児支援活動に参加しても良いと考えその47%は対象を限定しない幅広い育児支援者となりうる。育児支援を受けた経験がある者が育児支援を行う傾向がある。
12)	2007	乳児を持つ家族への育児支援プログラムの開発 －出産後1～3カ月の母子を対象とした家族支援プログラムの評価－	生後1～3か月児をもつ母親と家族への看護介入プログラムの考案、実施、評価すること	生後1～3カ月の母子とその家族 9組	週1回計4回 (初期プログラム)			家族成員個々の看護介入により母親の育児への対処の自信が高まり、家族の関係性への介入により夫婦、両親の役割調整、および祖父母との協力関係の調整が行われ、家族と社会の関係性への介入により母親同士のピアサポートが形成された。
13)	2007	育児支援者である祖母に求める母親のニーズ	母親が祖母に求める育児支援のニーズを明らかにし、祖母の役割について検討する	乳児健診に来た母親303(岩手県)名 有効152名	質問紙調査		内容分析	祖母の協力を得ることは非常に重要と考えている。しかしストレスになることもある。 育児法の相違などストレスもある。ニーズとしてはもともと子どもと触れ合って欲しい、見守って欲しい、新しい育児情報を得てほしい。 母親の意見を尊重して欲しい、で孫や母親との関わり方、接し方に対する要望が中心にあげられた。
14)	2008 (実践報告)	家族員の育児支援対処能力向上のための孫育児支援プログラムの有用性と課題	生後1年未満の孫の世話に関わる祖父母を対象にプログラムを実施、その評価を通して有用な孫支援のあり方を提示する。	分析対象は3回全 てに参加した2名	1ヵ月1回の 3回シリーズ その後の質問紙	祖父母 孫育児 支援プログラム	プログラム終了後の質問紙4段階リットカード法	①両親との関係の持ち方に大きな関心を持っている。 ②専門家による情報提供は育児対処能力を高めたり情報の共有化を通して家族の関係性を良好にする上で有効である。 ③参加者同士の情報交換は育児情報の受容や育児対処能力の客観視をもたらし。 ④多様なニーズの系統化、テーマ選定、時期の決定、ピアサポート力を高めるための看護方法の開発が課題。

15)	2008	わが国における祖母の 育児支援 ー祖母性と祖母力ー	祖母性と祖母力につい て分析 祖母自身の生涯発達に おける意味を	孫をもつ女性10 名	面接調査	祖母性 祖母力	祖母性の特徴として、老いを実感しつつも自分が没していくことを肯定的にとらえられる、人生に張り合いを持つ、育児のやり直し、としてとらえ概ね祖母になったことを肯定的に受け止めている。一方、育児支援を重荷と感ずる祖母もいる。どのようなことが重荷に感じるのであるのかその要因、背景を探る必要がある。
16)	2008	育児初期の母親の育児 支援のあり方に関する 検討Ⅱー子どもの発達 的変化、育児サポート とサポート源の関係構 造に焦点をあててー	産後の里帰りに焦点を 当ててその効果と課題を 検討する	1歳未満の乳児 を持つ母親594名	質問紙調査	育児初期 育児支援 子どもの発 達的変化 サポート現	実母、夫はいづれのサポートでも重視されている。子どもが成長しても同様に月齢年齢で差はない。育児初期の育児は、家族や親族の「自助」として行われることが多い。相対尺度法では「情緒的サポート」と「相談的サポート」が近くに配置していた。子どもの発達の変化にとれない重視されるサポート源が変容することが明らかになった。
17)	2008	仕事と育児を両立させて いる母親が体験している 家族 からの支援	共働き家庭の母親は、 実際にどのような家族 からの支援や協力が支 えになっているのかを 知る。	3名の母親	面接調査		家事育児の支援者は主として夫と実母、さらに子どもの成長とともに子どもにも期待している。 対象者の実家が車で30分圏内→実母に頼みやすい
18)	1992	大都市高齢女性の祖母 性	祖母のタイプを類型化 する	23区内60以上75 以下の7000名	質問紙調査 郵送法		祖母の意味類型は年齢、教育、親交関係、コミュニケーション活動、生活満足度、孫の年齢など相互の中に形成される。この意味類型は高齢女性のライフスタイルの指標の一つになる可能性がある。多い順に①均衡タイプ②シンボリックタイプ③個人志向タイプ④疎遠タイプ 孫の年齢、家族外のコミュニケーション、祖母の年齢がタイプを規定してくる。